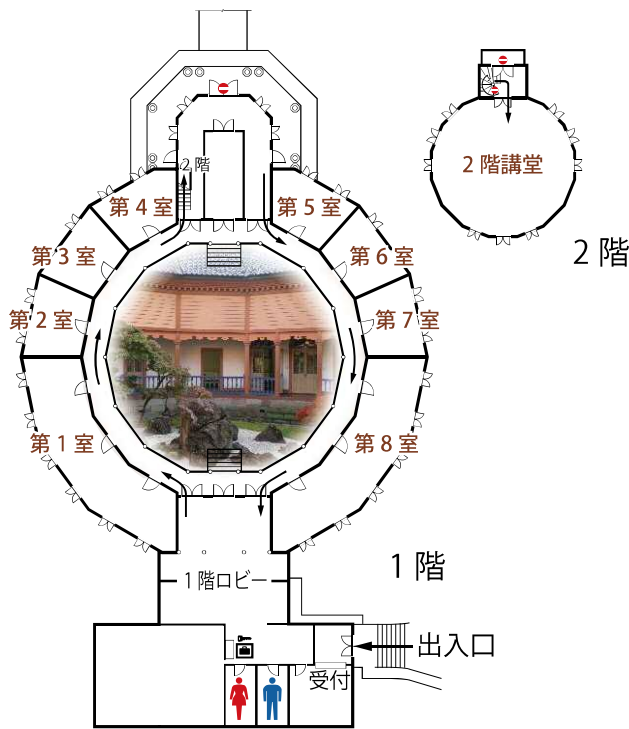




●フロアマップ

- 第1室 濟生館の歴史
- 第2室 ローレツ先生の部屋
- 第3室 ローレツ先生の教え子
- 第4室 薬剤関係資料
- 第5室 医学資料
- 第6室 医学書コレクション
- 第7室 濟生館復原工事資料
- 第8室 医学機器・病院資料
- 2階講堂 郷土資料



●展示案内

第1室 濟生館の歴史



濟生館は初代山形県令・三島通庸みしまみちつねによって建てられました。三島は西洋の良いところを取り入れ、人々の暮らしを豊かにする文明開化を進めます。そして、医学校も兼ね備えた県立病院である濟生館を造りました。三島通庸について紹介するパネルや、濟生館に関わる資料を展示しています。

第2室 ローレツ先生の部屋



明治13(1880)年、三島はオーストリア人医師のアルブレヒト=フォン=ローレツ(Albrecht Von Roretz)を濟生館医学校の教頭兼館医として招きました。ローレツは病院にドイツの薬品や医療機器を取り入れ、講義のほか、外科手術も行いました。ローレツの活躍により、医学校は東北地方におけるドイツ医学の拠点となりました。ローレツに関わる品々を展示しています。

第3室 ローレツ先生の教え子



ローレツの山形滞在はわずか1年10ヶ月でしたが、教え子たちが若い医師として育っていきました。その後、彼らは山形県の医学界を支える先達者となりました。工藤満くどうますし、音山金五郎おとやまきんごろうなどの教え子たち、山形医学校教員と卒業生たちの資料を展示しています。

第4室 薬剤関係資料



江戸時代(1603～1868年)・明治時代(1868～1912年)の漢方薬や薬の容器等が展示されています。ガラスが普及する以前は陶器に薬が入れられていました。漢方医が薬の材料を保管する「百味筆筒ひゃくみだんす」も展示しています。

第5室 医学資料



明治時代(1868～1912年)に北村山郡内の地方医として活躍した三浦みうら五郎ごろうに関わる資料を展示しています。三浦は東京大学を卒業後、済生館の研修医となります。その後「北村山郡医師会」を設立させ、山形内陸部医師会てんびん発足の先駆者となりました。他にも、薬剤を量るために使われていた天秤などの医学資料を紹介しています。

第6室 医学書コレクション



郷土館には多くの医学書が収蔵されており、第6室では、その一部を展示しています。江戸時代(1603～1868年)・明治時代(1868～1912年)に刊行された医学書や、東洋や西洋の百科事典や医学書の翻訳本などがあります。

第7室 済生館復原工事資料



昭和30(1955)年頃から、病院の近代化が求められる中で、老朽化したこの建物は壊される運命にさらされました。しかし、この本館が貴重な擬洋風建築として、昭和41(1966)年に国の重要文化財に指定され、現在の霞城公園内の場所に移築されることになりました。当時の復原工事に関わる資料を展示しています。

第8室 医学機器・病院資料



当時、済生館で使用されていたドイツ製の顕微鏡をはじめとした、様々な医学機器を展示しています。当時の診察風景の写真もパネルで紹介しています。明治時代の病院の情景に思いを馳せてみてください。

2階講堂 郷土資料



講堂は授業や式典をはじめ、いろいろな行事で使用されていました。現在は、山形の古い地図や、昔の街並みの写真など郷土の歴史に関わる資料を展示しています。当時は、やま だ なる あき山田成章の『ヒポクラテスの像』が2階講堂に飾られていました。現在はさん じょう さね とみ三条実美の『済生館』の額を飾っています。

利用案内

■開館時間 9:00～16:30 ■休館日 年末年始(12月29日～1月3日) ■入館料 無料

- ・館内は禁煙です。
- ・館内での飲食はご遠慮ください。
- ・建物の撮影は可能ですが、資料の撮影はご遠慮ください。
- ・通常、3・4階は非公開です。
3・4階の写真は1階ロビーに展示しています。



皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

擬洋風建築について

●擬洋風建築とは

1850～1880年頃、西洋の建築を日本の大工や職人がまねて建てた建造物です。西洋の建築に精通した外国人技術者や専門の建築技術者に頼らずに、地元の大工たちが見よう見まねで造りました。そのため、西洋建築に由来する形を持っていますが、細部を見ると洋風、和風、時には中国風の要素が混在しています。

1890年頃からは、西洋建築に対する認識が深まり、正確な西洋式の建築物が建設されるようになると、あまり造られなくなりました。

山形県内では 1876～1882 年まで山形県令を務めた三島通庸によって多くの擬洋風建築物が造られました。旧済生館本館もその中の一つです。

●擬洋風建築の特徴

1 さんそうろう 三層楼

外観は3層ですが、ベランダが4つあることからわかるように、内部は4階建てとなっています。このように複雑な構造は、屋根を支える構造の一部に西洋の技術が取り入れられているほか、日本古来の高度な木造建築技術によって造られたことによるものです。



2 ベランダ・バルコニー

1階は石敷きのベランダ、2階及び3階は両開きのガラス扉を持つベランダ、4階にはバルコニーがあります。ヨーロッパや東南アジアで多く見られる様式です。



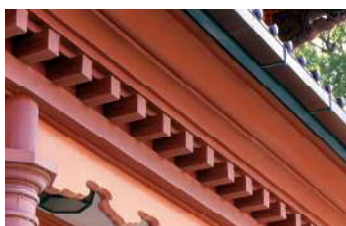
3 回廊

14角形の回廊でドーナツ型をしています。8つの部屋に分かれており、それぞれ診療室などに利用されていました。



4 瓦ぶき屋根・トタンぶき屋根

1階の屋根は瓦ぶきです。三島通庸が雪国でも使える割れにくい瓦を造らせました。



5 軒や柱の装飾

軒の部分に軒天井という板を張って段々の構造にしたものを軒蛇腹、軒の部分に四角い歯型の飾りが、ちょうどすきっ歯のように一定の間隔で配されている構造を、デンテイルとよびます。さらに下部の軒飾りは神社寺院を思わせる雲形デザインです。

のきじゃぼら



1階のベランダの柱はドリス式というギリシア時代初期の様式で、3階のベランダ部分の柱はコリント式というギリシア時代末期の様式が用いられています。



6 下見板張り

ヨーロッパの一地方に端を発する建築様式です。外壁の構造の一種で、板の重ね目を下向きにして雨水が内部に入らないようにしています。

7 鏡戸

植民地時代のインドや東アジアが始まりといわれています。通風・採光・雨よけのため、一定の傾斜を持たせた幅の狭い板を横に何枚も取り付けられた構造をしています。本館では、鏡戸を持つ扉の内側に、上下にスライドする上げ下げ式の窓があります。



8 ステンドグラス

ガラスが建具に使用されるのは明治時代(1868～1912年)になってからです。国産ガラスの製造が軌道に乗るまでは、輸入ガラスに頼らざるを得ませんでした。そのため大きなガラスを手に入れることは困難で、小さなガラスを組み合わせて作るステンドグラスが盛んに用いられました。

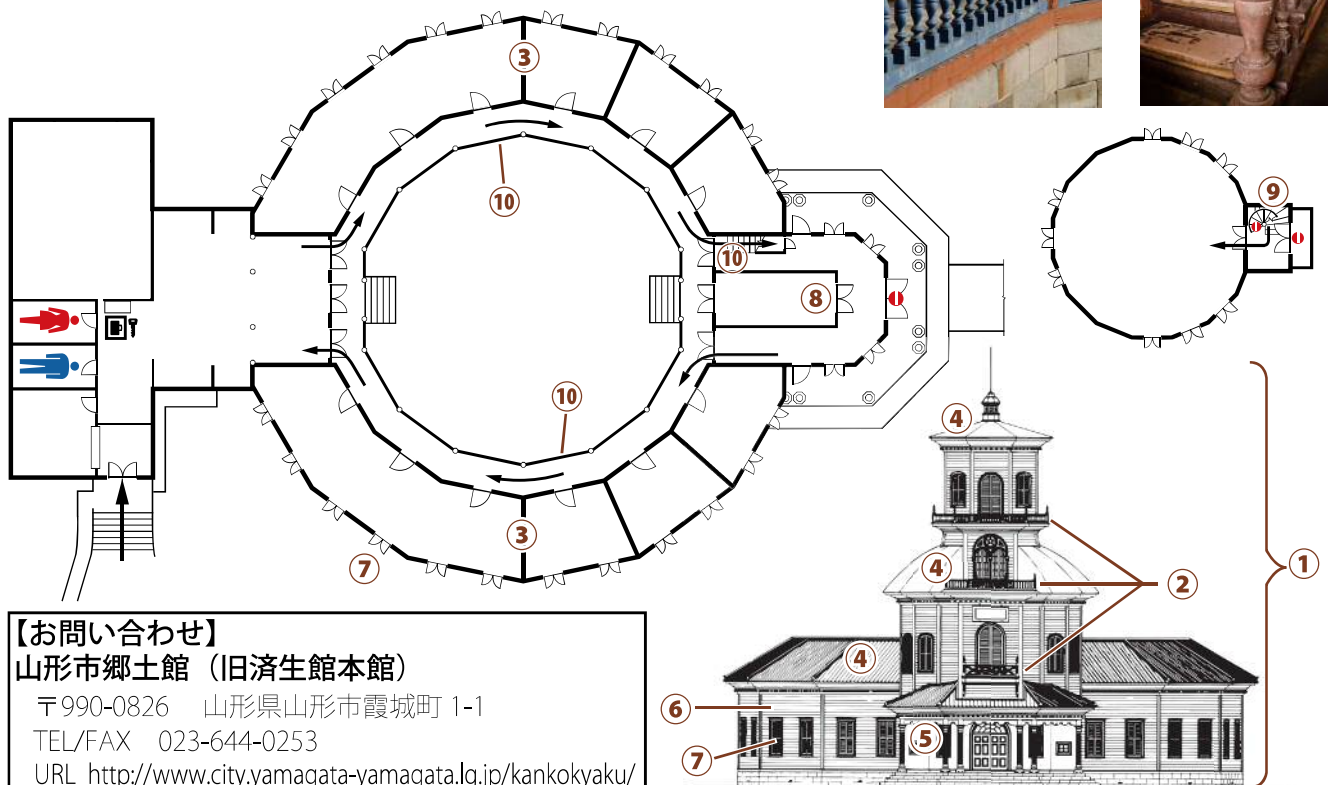


9 らせん階段

2階から3階へ上るための階段です。ケヤキが用いられ、側面には日本の伝統的な装飾である唐草模様からくさの彫刻が施されています。

10 手摺

こけしを作るような轆轤ろくろを使用して造られました。木製品を作る職人や、仏壇職人などが活躍したといわれています。



【お問い合わせ】

山形市郷土館 (旧済生館本館)

〒990-0826 山形県山形市霞城町 1-1

TEL/FAX 023-644-0253

URL <http://www.city.yamagata-yamagata.lg.jp/kankokuyaku/sub3/bunkazai/97270yamagatasikyoudokan.html>